東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

アーデルベルト・フォン・シャミッソーに見られる対立概念とその克服:『ボンクール城』(Das Schloß Boncourt)を中心にして

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 2009-12-10
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/874

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

アーデルベルト・フォン・シャミッソーに見られる対立概念とその克服

『ボンクール城』（Das Schloß Boncourt）を中心にして

渡 辺 国 彦

1

アーデルベルト・フォン・シャミッソー（Adelbert von Chamisso 1781-1838）は、幻想的な短編小説『ペーター・シュレミールの不思議な話』*Peter Schlemihls Wundersame Geschichte*（1813）を別にすれば、ロベルト・シューマン（Robert Alexander Schumann 1810-1856）の有名な歌曲集『女の愛と生涯』*Frauenliebe und Leben*（1830）をはじめとするいくつかの歌曲の詩人として我が国では、もっぱら、その名が知られているのが実情である。そのあまりにも有名になった歌曲の内容ゆえに、彼のイメージは、家庭的なビーダーマイヤー詩人という固定的なレッテルが貼られてしまっているかもしれない。しかし、その von Chamisso という名前が示すように、彼はフランスの亡命貴族の出身である。フランス革命によって、平和な恵まれた少年時代とは一転した波乱の人生をおくることになったのだ。

略奪や逮捕の危険から逃れるため生まれた城（ボンクール城）を捨て国境を超えた後は、家計を助けるため細密画や磁器の絵付けなどをして生活し、成人後はプロイセンの軍隊に士官として勤め反ナポレオンの解放戦争に参加してドイツ人としてフランス人と戦うため戦地に赴く。

ドイツの地に足を踏み入れて以来、生涯、克服せねばならない対立概念に悩むこととなる。自分はドイツ人か、それともフランス人なのか。少年期以後に習得した言語の問題。実務的な生活か詩人としての生活かの選択。自らが属していた貴族社会の基盤となっていた旧体制と次第に心惹かれる自由主義的な思想の対立。ロマン主義的な主題でもある放浪への嗜好と、市民として定住し家庭を持つことへのあこがれ。様々な対立概念が自己の同一性の喪失を引き起こし、またそれゆえにより確実なアイデンティティーを探し求めることとなる。

プロイセンの士官時代に書いた短編小説『ペーター・シュレミールの不思議な話』でシャミッソーの分身でもあるアイデンティティーをなくした主人公が、最後には、「千里靴」によって世界中を駆けめぐり、植物や動物の研究をすることに慰めを見いだした。この小説の結末が、シャミッソーのその後の人生を予言したかのように、彼はロシアの帆船による３年をかけた世界一周の研究旅行に参加し、植物学、動物学、ハワイ語などの言語学、民俗学などで後世に残

る成果をあげた。帰国後は植物学での成果をもとに役人としての安定した職を得て結婚、市民的な生活を送る。植物学を中心とした研究をおくる一方で詩作の発表を本格的に開始する。

詩は平穏な市民的な生活をあつかったものもあるが、言論統制の冬の時代にあって平穏な家庭に満足することへの自己批判の意識もあわせ持ち、解放戦争終了後のアンシャン・レジームのなかでの検閲強化にもかかわらず、貴族性に基づく復活した古い体制を痛烈に批判する詩も多く書いている。

いずれにしても、運命的に逃れることが難しい苦難に満ちた状況において精神的に彼にたいし慰めを与えたのは、幼いときから親しみ、最終的には専門分野にした植物研究であり、この研究から導き出された独特の世界観である。

今や畑となりその姿も失われた故郷の城「ボンクール城」を題材とした詩で表現しているのは、人間の人生をも植物の世代交代にたとえ、どのような運命も受け入れる世界観である。ボンクール城を題材とした詩にふれる前に、我が国では、あまり触れられることのないシャミッソーの生涯を、簡単に紹介しよう[1] 作家の生涯を知ることは、この詩の理解のためには特に重要であろう。

2

1781 年 14 世紀にさかのぼる古い貴族である Comte Louis Marie de Chamissot とその妻 Marie Anne Gargam の 7 人の子供の 6 番目としてフランス北東に位置しドイツ国境に近いシャンパーニュ（Champagne）の Sainte-Menehouid 近郊のボンクール（Boncourt）城で生まれる。正確な誕生日は本人にもわからないが、1 月 31 日に Louis Charles Adélaïde の名前で洗礼（後に Adelbert von Chamisso に変更する）。彼の兄弟には Charles Louis Marie Hippolyte (1769 - 1841), Louis Marie (1772 - 1778), Jean Baptiste Marie, 通称 Prudent (1773 - 1796), Charles Louis (1774 - 1822), Madeleine Louise (1779 - 1845）と弟の Charles Marc Eugène (1784 - 1802）がいる。

1789 年（8 歳）フランス革命の勃発　1 月：Emanuel-Joseph Sieyès のフランスの第 3 身分の状況と要求についてのパンフレット。3 月：アメリカ合衆国憲法の宣言。6 月：フランス 3 部会の国民議会への要求。7 月 14 日：バスティーユ襲撃。8 月 4-11 日：とりわけ封建システム廃止のために国民憲法の発布。8 月 26 日：フランス国民憲法による人間と市民の権利の宣言

1　Ulrike Weheres, Wolfgang Deninger: Chamissos Lebens Bild. In: Adelbert von Chamisso Werke in zwei Bänden. Band 1. Stauffacher-Verlag. Zürich. 1971, S.7 - 63.
Beatrix Langler: Der wilde Europäer. Matthes & Seitz. Berlin. 2008.
Robert Fischer : Adelbert von Chamisso. Erika Klopp Verlag. Berlin-München. 1990. 他を参照。

1790 年（９歳）貴族であるシャミッソー家は、暴徒による襲撃あるいは革命政府による逮捕および処刑を恐れ、ボンクール城から近郊の Châlons-sur-Marne に移る。
ニームでプロテスタントと革命に反対するカトリックの衝突。７月から９月：貴族の称号の廃止。古い上級裁判所の廃止。12 月：地主への税の存続に抗議した武装した農民の蜂起。

1791 年（10 歳）ルイ 16 世の逃亡の後各地で農民蜂起。王はシャンパーニュの Varennes で捕まり、パリに連れ戻される。７月 17 日:国民親衛隊による反君主制的表明への暴力的な解消《シャン・ド・マルスの虐殺》。国民議会の亡命者への帰還の呼びかけ。９月３日：ヨーロッパ大陸における最初の記述された憲法の採択。立憲君主制：ルイ 14 世が憲法に宣言。９月：ユダヤ人への市民的同権。

1792 年（11 歳）５月にシャミソー家はフランスを去り、父は亡命者によって編成された軍に中佐として加わる。1792 年 12 月 26 日と 1793 年１月７日の間にボンクール城の家族所有の動産が競売にかけられ、城の建物は建築用の資材として取り壊され売られる。
４月 20 日：フランスのオーストリアへの宣戦布告。第一次同盟戦争（対オーストリアとプロイセン）。８月 10 日：王逮捕。
８月 14 日：共有地の分割と亡命者の残した所有物の売却が決定される。
８月末：封建法の賠償なしでの廃止。９月パリでの新しい虐殺。一般選挙権に基づくフランス国民議会の選挙。９月 21 日議会が王権を廃し、共和制になる。

1793 / 94 年（12-13 歳）シャミッソー家は Lüttich, Haag そして トリーアに滞在。Adelbert（シャミッソー）は、ときより家族から離れて生活。フランス語による最初の詩。
１月 21 日：ルイ 16 世処刑。６月：組織的な恐怖政治の始まり。イギリス、オランダ、スペインが対フランスのオーストリア・プロイセン同盟を支持する。ポーランド分割。
1794 年７月 27-29 日：ロベスピエールとその賛美者の失脚と処刑。恐怖政治の終了。

1795 年（14 歳）シャミッソー家はデュッセルドルフ、ヴュルツブルクとバイロイトに滞在。Adelbert は彼の兄たち Hippolyte と Charles Louis のように細密画家として家族の生活費を得るために働く。Prudent はベルリンでユグノー教徒の繊維工場経営者のもとで家庭教師の職を得る。

1796 年（15 歳）５月 Prudent の助けでシャミッソー家はプロイセンの首都に到着。Adelbert は王立磁器工場の絵付け画家としての職を得る。後に王女 Friederike Luise の小姓。王女の好意で 1798 年までベルリンのフランスギムナジウムに通学。
７月　Prudent は、生徒と共にベルリンで水死。

３月：ナポレオンの最高司令官への任命。イタリア遠征。スペインのフランスとの同盟。

1797 年（16 歳）フランスとオーストリア間のカンポ・フォルミオ（Campo formio）条約
第一次同盟戦争の終結。Friedrich Wilhelm ３世がプロイセンで統治。

1798 年（17 歳）シャミッソーはプロイセン軍の下士官（Fähnrich）になる。ナポレオンエジプト遠征。フランス艦隊ネルソンに敗れる。

1799 年（18 歳）シャミッソーはフランス啓蒙家の著作（Voltaire、Diderot、Rousseau）や Klopstock や Schiller の作品を読む。３月：第２次同盟戦争の開始。11 月：ナポレオンのクーデター。第１執政官に就任。

1800 年（19 歳）フランスとオーストリア間の停戦条約。イギリスが Malta を併合。

1801 年（20 歳）シャミッソーは少尉に昇進。２月：両親は、ナポレオンによる許可に基づきフランスに戻る。シャミッソーと彼の弟 Eugène は経済的理由によりベルリンにとどまる。
フランスとオーストリア間リュネヴィル（Lunéville）の和約。ロシア皇帝アレクサンドル１世（Alexander I.）イギリスとフランスに対する同盟を結ぶ。

1802 年（21 歳）８月に病気の弟 Eugène とフランスの両親のもとに旅行、そこで弟は死ぬ。イギリス・フランス間の和平。第２次同盟戦争終結。ナポレオンは国民投票で終身執政官に選ばれる。

1803 年（22 歳）シャミッソーはベルリンに戻る。*Faust* 断片。August Wilhelm Schlegel のところでの朗読、Johann Gottlieb Fichte との交友。
文学と学問の興味を有した交友関係の成立：Louis de la Foye, Julius Eduard Hitzig, Ferdinand Koreff, Wilhelm Neumann, Ludwig Friedrich Franz Theremin, Karl August Varnhagen。後には Heinrich Julius Klaproth も。ユダヤ人 Cohen と Ephraim の家での交友。シャミッソーの歩哨詰め所での会合。ギリシャ語研究。仲間との文芸誌 *Musenalmanach auf das Jahr 1804* をシャミッソーの費用で印刷。フランスの移民 Cérès Duvernay への恋。
ラインの左側からの撤退による賠償。Preußen, Bayern, Baden und Württemberg の領土拡張。
フランスとイギリスの海戦。ナポレオン法典。

1804 年（23 歳）ギリシャ語を習う。*Musenalmanach auf das Jahr 1805* に取り組む。Cérès は Königsberg へ旅立つ。

12 月：ナポレオンの戴冠。

1805 年（24 歳）*Musenalmanach auf das Jahr 1806* に取り組む。８月終わり；シャミッソーの所属する連隊にヘッセンへの行軍命令がでる。
第３次同盟戦争。プレスブルク (Preßburg) の和約。領土損失の補償としてプロイセンはイギリス支配のハノーヴァーを得る。Austerlitz 近郊の戦いでナポレオンはロシアとオーストリアに勝利。

1806 年（25 歳）５月：シャミッソーの連隊は継続的占領としてハーメルンの要塞にはいる。復活祭：Varnhagen と Neumann がハーメルンを訪れる。シャミッソーは、軍隊からの除隊願いを提出するが夏に拒否される。短編 *Adelberts Fabel*。７月 : Fouqué を訪問。11 月 21 日 : シャミッソーの部隊は、戦わずして降伏ハーメルンの要塞を引き渡す。フランスに対する敗北にドイツ人の戦友と同様な絶望感を味わう。シャミッソーはフランスの彼の家族のところへ旅行し、両親の死を知る。母 10 月 20 日。父 11 月４日。Cérès Duvernay との新たな出会い。
プロイセン、オーストリア、Kurhessen と Braunschweig をのぞくドイツの諸国はライン同盟に加入。10 月８日：プロイセンのフランスへの宣戦布告。10 月 14 日 : Jena と Auerstedt 近郊でのナポレオンの勝利。ナポレオンベルリン入場。

1807 年（26 歳）パリの兄弟のところに滞在。９月終わり：ドイツに戻る。Nennhausen の Fouqué を訪れる。そこで彼は Varnhagen と Neumann に会う。10 月に彼は Varnhagen と歩いて Hamburg に行き、最終的にベルリンに戻る。
ティルジット（Tilsit）の和約（７月９日）

1808 年（27 歳）ベルリンにおける増大する民族的運動。シャミッソーは亡命者として民族的運動からから距離を置く。兵役からの公式に辞任することへの許可が下りる。

1809 年（28 歳）３月：シャミッソーは、ハーメルンでの降伏の際におきた騒ぎに関する捜査に投入された委員会から状況にふさわしい態度をとったとの証明を得る。重い鬱症状。ときおり家庭教師として働く。

1810 年（29 歳）フランスの Napoléonville に高等学校教師の職に招聘される。パリ滞在中に職が取り消されたとの知らせ（後に、再度の招聘があったが、シャミッソーのほうから断る）。ドイツのコロニーで Alexander von Humboldt, Ludwig Uhland, August Wilhelm Schlegel, Varnhagen und Koreff と接触。Helmina von Chézy との親密な関係（シュレーゲルの作品の共同訳の作業など）。スタール夫人（Madame de Staël）のサークルに通う。スタール夫人がフランスから追放される。

1811 年（30 歳）３月：ジュネーブに滞在するスタール夫人のもとへの旅行

1812 年（31 歳）友人 de la Foye より植物学への刺激を受ける。
ベルリンで自然科学を学ぶ決意。ナポレオンロシア遠征。

1813 年（32 歳）シャミッソーはベルリン近郊で植物採集をする。５月から 10 月：Itzenplitz-Friedland 家所有の広大な農場に各種の植物を採集。そこで最初の植物学的著作とともに小説『ペーター・シュレミールの不思議な話』も成立。ベルリンに帰った後、動物学、鉱物学、比較解剖学、ラテン語等の講義を受ける。
２月終わり：プロイセンとロシアの同盟３月 16 日：プロイセンのフランスに対する宣戦布告。
10 月 16 日から 19 日：ライプチヒ近郊の戦い。ナポレオン撤退。

1814 年（33 歳）シャミッソーは、自分の植物標本室で働く。『ペーター・シュレミールの不思議な話』出版。
ナポレオンがエルバ島に追放される。ウィーン会議開始。５月パリ第１回講和。

1815 年（34 歳）ゼラピオン同盟の仲間（Serapionskreis）との共同執筆
６月 12 日：Otto von Kotzebue を船長としたロシア太平洋北極探検に自然科学者として参加することへの認可を得る。８月 17 日　帆船 »Rurik« 号で出発。
３月：ナポレオンがフランスに戻る。100 日天下。
６月 18 日：Waterloo の戦い。７月７日：ナポレオンがヘレナ島に追放。
11 月 20 日:第２回パリ講和　ウィーン会議終了。ドイツ同盟。全ドイツ学生同盟（Allgemeine Deutsche Burschenschaft）がイエナで設立。

1816 年（35 歳）１月ホーン岬。３月チリ滞在太平洋横断の準備。
最初の北行き航路。Kotzebue 海峡の発見。Unalaschka 経由でサンフランシスコ、ハワイ。

1817 年（36 歳）第２回北行き　ハワイ経てフィリピンへ。
ヴァルトブルク祭（学生同盟のドイツ統一への要求）での非ドイツ的及び反動的書物の焚書。

1818 年（37 歳）コペンハーゲンを経由 St. Petersburg へ。10 月 31 日：ベルリン着。
シャミッソーは彼の旅の記録の学問的な部分を書く（*Bemerkungen und Ansichten,*1821 年出版）。

1819 年（38 歳）３月 20 日：ベルリン大学の名誉博士に任命される。10 日後には、彼はベルリンの自然科学者の協会の会員になる。植物園での第一助手（Botanischen Garten）と王立

植物標本館（Königlichen Herbarium）の第２責任者（zweiter Kustos）。９月25日：18歳のAntonie Piasteと結婚（Hitzigの養子）。
ロシア太平洋北極探検の船長の父で作家のAugust von Kotzebueが暗殺される。８月：カールスバートの決議。

1820年（39歳）最初の息子誕生。植物学の著作*Ein Zweifel und zwei Algen*。ギリシャ独立戦争。

1821年（40歳）シャミッソーの*Bemerkungen und Ansichten*出版。兄Hippolyteによる『ペーター・シュレミールの不思議な話』のフランス語への翻訳。最初の政治的詩。
ギリシャ独立運動。

1822年（41歳）Hoffmann von Fallerslebenと知り合う。２番目の息子。

1824年（43歳）有用植物と毒性植物についての著作。Hitzigにより創設された文学協会 »Mittwochsgesellschaft« 会員になる。会員は、Eichendorff, Fouqué, Varnhagen, Neumann, Immermannなど。

1825年（44歳）シャミッソーの喜劇*Die Wunderkur*上演
10月：パリに行きフランス革命のときに失った資産に対する保証金を得る。

1827年（46歳）最初の娘が生まれる。『ペーター・シュレミールの不思議な話』第２版、詩の付録付き（『ボンクール城』を含む）で出版。「ドイツの詩人」として思いがけない成功し、詩人としての地位をようやく確立する。

1828年（47歳）多くの詩とともに検閲と出版の自由に関する論文を書く。

1829年（48歳）３月：２番目の娘。犬税（Hundesteuer）が各地で施行される。[2]

1830年（49歳）パリ７月革命はシャミッソーにより熱狂的に見守られる。９月ハンブルクへ自然科学者の集会へ。ハイネに会う。３番目の息子。

2　Adelbert von Chamisso: Werke in zwei Bänden. Band 2. Stauffacher-Verlag. Zürich . 1971, S.155. シャミッソーは、彼の詩『乞食と彼の犬』（Der Bettler und sein Hund）（1829）で愛犬に対する税を払えず自殺する貧しい者を描いて、支配者を批判している。

仕立屋革命[3]（Schneiderrevolution）。

1831 年（50 歳）詩全集出版。

1832 年（51 歳）*Deutscher Musenalmanach* の編集を Gustav Schwab と始める。
４番目の息子。
Hambacher Feste（支配階級をのぞく職業や国籍を超えた様々な立場の民衆 30000 人によるドイツ統一と民主主義的要求の集会）。

1833 年（52 歳）王立植物標本館（Königlichen Herbarium）において第 1 責任者（erster Kustos）の地位につく。重い風邪の症状（持続的な健康障害の兆候）。
プロイセンの主導で 18 の国家からなるドイツ関税同盟が設立される。

1834 年（53 歳）詩集第２版。世界旅行の日記の出版のための準備。

1835 年（54 歳）５番目の息子。『ペーター・シュレミールの不思議な話』第３版　ベルリン科学アカデミー会員（Berliner Akademie der Wissenschaften）。
Bad Reinerz で湯治。若きドイツ派の本が禁止される。最初のドイツの鉄道。

1836 年（55 歳）シャミッソーが担当した *Deutscher Musenalmanach* の編集において、ハイネの肖像の掲載計画が原因でシュヴァーベンの詩人たちともめる。ハワイ語に関する論文。

1837 年（56 歳）夫人の死。ライプチヒ・ドレスデン間の鉄道に乗るためライプチヒに赴く。ハワイ語辞書の仕事。

1838 年（57 歳）ベルリンにて死去。

3

３年におよぶ航海にさきだつ 1814 年に出版された『ペーター・シュレミールの不思議な話』は、シャミッソーが長い航海で留守をしている間に好評を得ていた。これに気をよくしたシャ

3　Schneiderrevolution　７月革命を賛美した仕立屋の逮捕に抗議した組合による大規模なデモ。イギリスからの機械の導入に対する不安と犬税に対する抗議も原因か。

ミッソーは、ようやく自らのドイツ詩人として価値を世間に問う気になったのであろう。『ペーター・シュレミールの不思議な話』第２版の出版の際に巻末の付録としていくつかの叙情詩が付け加えられた。それらの詩は、シャミッソーの予想以上の評価を獲得し、46 歳にしてドイツを代表する詩人の仲間入りを果たしたのである。『ボンクール城』の詩は、今日でもシャミッソーの作品の中でも特に優れたものだと見なされている。

Das Schloß Boncourt（1827）	ボンクール城
	Adelbert von Chamisso
Ich träum' als Kind mich zurücke	私は子供にもどり夢見ている
Und schüttle mein greises Haupt;	そして己の白髪の頭をふる、
Wie sucht ihr mich heim, ihr Bilder,	いかにしてお前たちは私のもとを訪れるのか、
Die lang' ich vergessen geglaubt?	長いこと忘れていたと思っていたお前たちイメージよ。
Hoch ragt aus schatt'gen Gehegen	陰のある領域から高く
Ein schimmerndes Schloß hervor;	ほのかに輝く城が聳え立っている、
Ich kenne die Thürme, die Zinnen,	私は塔や鋸壁（きょへき）や、
Die steinerne Brücke, das Thor.	石の橋や、門を知っている。
Es schauen vom Wappenschilde	紋章のついた盾から
Die Löwen so traulich mich an,	ライオンたちが親しげに私のほうを眺めている、
Ich grüße die alten Bekannten	私は古い知人たちにあいさつし
Und eile den Burghof hinan.	中庭に急いで入る。
Dort liegt die Sphinx am Brunnen,	そこではスフィンクスが泉のそばに横たわり
Dort grünt der Feigenbaum,	そこではイチジクの木が緑に茂る、
Dort, hinter diesen Fenstern,	そこでは、この窓の後ろで、
Verträumt' ich den ersten Traum.	私は最初の夢を見てすごした。
Ich tret' in die Burgkapelle	私は城の礼拝堂にはいり
Und suche des Ahnherrn Grab	祖先の墓を探す
Dort ist's, dort hängt vom Pfeiler	そこにそれがある、そこでは柱から
Das alte Gewaffen herab.	あの古い武器がさがっている。

Noch lesen umflort die Augen	涙で曇り、目はまだ
Die Züge der Inschrift nicht,	刻まれた文字の跡を読めない、
Wie hell durch die bunten Scheiben	色鮮やかなガラス窓を通してなんと明るく
Das Licht darüber auch bricht.	光がその上方に入ることか。
So stehst du, o Schloß meiner Väter,	このようにお前はたっている、おお、私の父たちの城よ、
Mir treu und fest in dem Sinn,	私の記憶の中に忠実にそしてしっかりと
Und bist von der Erde verschwunden,	そしてお前は地上から消えてしまった、
Der Pflug geht über dich hin.	鋤がお前の上を通り過ぎている。
Sei fruchtbar, o teurer Boden,	実り豊かであれ、おお、かけがえのない土地よ、
Ich segne dich mild und gerührt	私はお前をおだやかにそして感動して祝福する
Und segn' ihn zwiefach, wer immer	そしていつもお前の上に
Den Pflug nun über dich führt.	鋤をひく者を重ねて祝福する。
Ich aber will auf mich raffen,	しかし私は元気よく立ち上がり、
Mein Saitenspiel in der Hand,	弦楽器を手に、
Die Weiten der Erde durchschweifen,	地上のあちこちをさまよい
Und singen von Land zu Land.[4]	そして歌いたい、国から国へと。

一部の例外的な箇所をのぞき、規則的に１行に３つのヘーブングすなわち強音のある音節を持つ。ヘーブングの間に１つないし２つのゼンクングすなわち強音のない音節が塡められている。もちろん Sei fruchtbar, o teurer Boden の箇所などは、この行で読まれている意味的な内容に従って X́X́XX́X́XX́X などと均衡強音（Schwebende Betonung）で読まれるべきである。比較的自由な塡めとわずかな均衡強音が、意図された単調さに抑制された動きを与えている。行末に注目すれば、WAWA/ WBWB/WCWC/……WHWH/ WIWI と一貫してどの節も偶数行どうしが韻を踏み、奇数行は無韻である。[5] さらに、たとえば第１節を例にすると、

Ich träum' als Kind mich zurücke	X́XX́XXX́X
Und schüttle mein greises Haupt;	X́XXX́XX́
Wie sucht ihr mich heim, ihr Bilder,	X́XXX́XX́X
Die lang' ich vergessen geglaubt?	X́XXX́XXX́

4　Adelbert von Chamisso: Adelbert von Chamisso's Werke. Dritter Band. Widmann'sche Buchhandlung. Leipzig. 1842, S.81f.

5　W＝Waise（みなしご）無韻の詩行

のように韻を踏まない奇数行はヘーブングの後にゼンクングで終わり、韻を踏む偶数行はすべてヘーブングで終わる男性韻である。これはすべての節に当てはまる。このことが、韻律的に各節のなかで１行目と２行目、３行目と４行目の結びつきを作り、２行目と３行目ならびに各節の間の区切りを形作ることになる。つまり各節が二つの部分に分かれた８節、計 16 の部分が整然と並び、Ich aber will auf mich raffen（しかし私は元気よく立ち上がり）の箇所ですら極端な感情の高まりはない。韻律的には、ある種のもの悲しさを想起させる効果がある単調といってよい形式のなかを淡々とした詩の意味内容が夢の記憶のように節をまたいで切れ切れに流れている。

内容に従って、この詩を３つの部分に分類することもできる。最初と３番目の部分（第１節と第７から第９節まで）は、この詩の語り手が現在の状況を説明している。最初の部分では、話し手の職業や身分は判断できない。子供のころの光景に執拗にとらわれ[6]夢見ているのが宣言され、現在は白髪になるまで年をとっている作者は、それに対し拒絶の身振りをする。[7]

中間部分を構成する第２節から第６節までは、子供の頃の光景が現在形で表現されている。思い出された出来事なのではあるが、現前化され時間の概念は止揚されている。次々に幼かった頃いた城の記憶が描かれる。しかしこの現前化とともに、記憶の論理的な連続性の欠如やわざとらしさを感じさせるほどの意図的ともいえる対象と距離を置く表現が混在している。

記憶の現前化は、第２節でほのかに輝き聳え立つ城を、外から眺めることから始まる。そしてさらに城に近づき石の橋や門を通り城の敷地の中に入る。第３節で親しげにこちらを見る紋章のライオンからこの場所がシャミッソー家代々の城であることが強調され、知人たちに挨拶することからまだ生き生きとした賑わいがあることが暗示される。なぜか私は中庭に急ぐ。中庭は、子供時代の思い出に満ちた場所であるかのように。

第４節では、その中庭が説明されている。しかし、私は急がなければならないほどの重要な場所である中庭に実際に入っていったのだろうか。第４節での中庭の描写には、dort（そこで）という副詞が３度も連続して行の始めに使われている。この dort の使用により、そのつど中庭にある「泉のそばに横たわるスフィンクス」や「緑に茂るイチジク」や「そのうしろで私が最初の夢を見て過ごした窓」と語り手である私の間の距離が広がってしまっている。さらに Verträumt' ich den ersten Traum.「私は最初の夢を見てすごした。」の箇所で私は急に過去形で回想する。時間的にも子供時代から遠ざかり現在の私の視点になってしまっている。第３節でも、「私は古い知人たちにあいさつし」とあるが、ここであいさつする私はいったい何歳の私なのだろうか。シャミッソーがこの城から逃げたのはまだ９歳であった。ここで昔からの知人に挨拶する私は９歳の生活をしている私としてはいかにも不自然であろう。そう考えると「昔

6　シャミッソーは、死の直前に熱にうなされ、朦朧した意識の中でフランス語を話していた。

7　Er schüttelte sein greises Haupt には、たんに「彼は拒絶した」の意味で年齢に関係なく現在でも一般的な表現として使われることがあるが、この慣用表現はシャミッソーのこの詩における「己の白髪の頭を振る」の箇所から由来するものである。

からの知人たち」の姿すら人工的な印象をあたえてしまう。

第５節ではその子供としての不自然さをさらに裏付けるかののように、「私は」あのころ遊んだ場所や子供部屋ではなく城の礼拝堂に入り、祖先の墓を探す。過去を振り返るのではなく、現前化された過去に現在の「私」あるいは詩を書いている当時の「私である」シャミッソーが紛れ込む。「そこに（dort）それが（祖先の墓）がある、そこでは（dort）柱からあの古い武器がさがっている」。第４節に続いて、また距離を遠ざける副詞 dort の連続した使用がみられる。この詩を詩作した頃にはシャミッソーがすでに過去のものになることを望んでいた戦いの概念である「武器」の描写が唐突に現れる。この古い武器は墓と結びつけられて、シャミッソー家の古い秩序につかえるまるで象徴であるかのようだ。第６節では、「私」は、墓に刻まれた文字を読もうとするのだが、「なんと明るく（wie hell）」光が色鮮やかなステンドグラスを通して差し込むにもかかわらず、目が曇って読むことができない。

Louis Brouillon は、「筆跡の謎解きにこの子供は、強い情動的な動き故に失敗する。墓の碑文の内容は謎のままであり、明るいいつもはいきいきと作用する太陽の光もここではなにも明らかにしないあるいは生命をあたえない。このようなネガティフな結果にもかかわらず根源的な神話の形成が重要だということを歴史的な事実との比較が示している。」[8] と指摘する。これについての Vollker Hoffmann の記述を要約すると、この詩は、先祖 Robert Jean de Chamisso の墓を墓が実際に存在する隣の村の教会から場所を礼拝堂が現実には存在していないこの城に移している。Boncourt 城は Émilie de Chérisey との結婚による持参金として Chamisso 家の所有になったのだが、この詩ではそのこともふれられていない。彼女は彼女の夫の墓の中に同様に埋葬されている。そしてこの詩は、墓の碑文が革命の時期に暴力的な記録抹殺刑 >damnatio memoriae< によって、ほとんど読めない状態にされた事実を子供の一時的な読む能力の不足を原因として歪曲している。[9]

したがって、第７節の「私の父たちの城」という表現は、シャミッソー家代々の城という意味で事実に反するし、「男の祖先の墓」（des Ahnherrn Grab）もこの城には存在せず、古くからおそらく「あの古い武器」で王に仕えてきたシャミッソー家のこの城との結びつきの連想も事実に反して創作されたものである。

第７節の後半で、現在、城は地上から消えていることが明らかになるが、城を捨て、城が破壊されることになった原因である革命の話はふれられていない。もっとも、当時としての読者

8　Louis Brouillon: Les origines d'Adelbert de Chamisso. In : Travaux de l' Académie de Reims. Bd. 127,1. Reims. 1910, S.302-354. Nach: Gedichte und Interpretationen Band 4, Vom Biedermeier zum Bürgerlichen Realismus. Hrsg. von Günter Häntzschel, Philipp Reclam jun. Stuttgart. 1983, S.63. Künstlerselbstzeugung durch Metamorphose: Naturpoesie aus den Ruinen der Zivilisation. Zu Adalbert Chamissos Gedicht «Das Schloß Boncourt».

9　Vollker Hoffmann: Gedichte und Interpretationen Band 4. Vom Biedermeier zum Bürgerlichen Realismus. Hrsg. von Günter Häntzschel. Philipp Reclam jun. Stuttgart. 1983,（以下 Vollker Hoffmann と記述）S.63f. からの要約

にとっては、あるいは現代の読者にしても彼の名前と生きた時代からして、シャミッソーの亡命とフランス革命の関係は自明のことであろうが。いずれにしても、1790年にシャミッソー家がボンクール城を捨てて逃げた後、1792年の12月26日から1793年1月7日の間に没収され、競売にかけられ、最終的には城の建物は建築用資材として取り壊されて売られたのだ。

第8節で彼は、貴族のすべての特権を奪われ、家族は離ればなれになり、長年にわたるドイツという異国の地での生活や同化への筆舌に尽くしがたい苦労を恨むどころか、城が立っていたこの土地に祝福をあたえるのである。そのうえ鋤をこの土地を耕す者に2重の祝福をあたえるのである。

地方の封建貴族であるシャミッソーの住んでいたボンクール城の現実の規模はそれほど問題ではない。それでも、この詩において、第2節のhervorragen（聳え立つ）や、die Türme（複数の塔）、die Zinnen（鋸壁）や、Die steinerne Brücke（石の橋）、das Thor（門）などからこの城が語り手に安心を与えてくれたことがわかる。それも、第4節に「私は最初の夢を見てすごした。」とあるようにこの城で生まれてからその状態が続いてきたことが暗示されている。シャミッソー家の紋章や古い友人それにシャミッソー家ならびにフランスを守ってきたことを伺わせる「あの古い武器」によって、そしてシャミッソーによって作られた「事実」ではあるにしても、祖先の墓によって長きにわたる城の永続性および貴族の血筋としてのシャミッソー家との深いつながりが示されている。

無意識か意識的かはともかく、整理すると次の3つの特徴が中間部にある。

1）自分のルーツの強調（昔から続くフランスの貴族＝城、紋章、先祖の墓など）

2）少年期の記憶にあらわれるよそよそしさあるいは不自然さ。（過去の記憶のなかに、過去からの決別の決意がはいりこむ＝たどり着かない遊び場、読めない碑文など。）

3）城を捨てた理由の隠蔽

農地とそれを耕す者への祝福に関してVollker Hoffmannは、これを「過剰補償」(übekompensatorisch)[10]だと説明する。罵りを祝福に転じることは、あたえられた現実を力強く制御する試みであると。

「その克服はシャミッソーの多くのほかの詩のなかではっきり証明されているように、そのポーズはテキスト外的に（text-extern）、貴族の素性と地位の偏見からのとりわけ市民的な解放の意味において、損失の過剰補償的な克服として理解されることが許されるだけではない。世界旅行後の彼の市民的－家族的な存在態度（Existenz）をもよく証言している。」[11]

1820年秋に彼の最初の息子が生まれた時、彼は、「私の息子の運命を規定することができれば、およそ彼の父と同じようであることを私は望むだろう、しかし早めにそれに取りかかりそんなにながく困難を切り抜けるのに時間がかからないことを望むだろう、彼が港を出て自分の経歴

10　Vollker Hoffmann　S.65f.
11　Vollker Hoffmann　S.66.

をたどる前に。彼がなりたいものになるのが良かろう。しかしそれは全く名前によるものではない。靴屋でも詩人でも、しかし彼の立場で一級の一人でありその無名の一員ではないことを。彼がやりたいものをやれ、しかし彼はりっぱにとりかかり心を込めてそれにあたれ」[12] と書いた。４番目の息子が生まれた 1832 年に書いた詩『コウノトリ』der Klapperstorch では、同様に、次のように従来の貴族的な価値観との決別を息子と共有することを宣言しているが、「ボンクール城」をあつかった詩との相似はあきらかであろう。

・・・

Da legten sie, mit gläub'gem Sinn, zu mir dem Knaben
そのとき彼らはおごそかな気持ちを持って子供である私に
Des Vaters Wappenschild und Schwert;
父の紋章や剣をおいた。
Mein Erbe war's, und hatte noch, und sollte haben
私の遺産はそれだった、そしてそれは良き価値を持ち
Auf alle Zeiten guten Wert.
いつの時代にもそうであるはずだった。

Ich bin ergraut, die alte Zeit ist abgelaufen,
私は年をとり、古い時代はすぎさった、
Mein Erb ist worden eitel Rauch.
私が受け継いだ遺産はむなしい煙となった。
Ich mußte, was ich hab und bin, mir selbst erkaufen,
私が持っているもの私が現にある存在を私は自ら買わねばならなかった、
Und du, mein Sohn, das wirst du auch.[13]
そして、私の息子よ、そうおまえもなるのだ。

あるいは、遺書の中でさえ「私は望む、彼らが勉強することを、資金がある限り。もし誰かが市民的な職業に移ることを望んでも私は全くかまわない。剣の時代は終わった。産業が世界で力と気品を獲得する。いずれにせよ有能な労働者は程度の低いその他大勢の三流文士や役人よりよほどよい」[14] と共和制に共感し [15]、貴族ではない妻 [16] と結婚したシャミッソーは子供たち

12　Adelbert von Chamisso: Werke in zwei Bänden, Band 1. Stauffacher-Verlag, Zürich. 1971, S.45.
13　Adelbert von Chamisso: Werke in zwei Bänden. Band 2. Stauffacher-Verlag. Zürich. 1971, S.43f.
14　Adelbert von Chamisso: Werke in zwei Bänden. Band 1. Stauffacher-Verlag. Zürich. 1971, S.54.
15　共和制への共感は、すでに 1813 年頃から表明している。たとえば 1813 年の Varnhagen や 1814 年の Louis de la Foye 宛ての手紙を参照。

のために書き残している。

第７節の「城」と第８節の「大地」には »o Schloß« と »o teurer Boden« のように o という感嘆詞がつき、城も大地も同様に du あるいは dich（お前）と親しげに親称で呼びかけられる。城とそれがあった土地は、多くの損失をシャミッソーに与えたにも関わらずここで同じ価値があたえられている。城の消失の原因などの回りくどい説明などなしにあっというまに新しい価値に変容したのである。先祖の墓などに代表されるフランス封建貴族としての象徴を詩の中で城に付加したことで、城の消滅と共にそれらの古い価値も同時に魔法のように消し去る効果が得られた。城で象徴される武器で支配する貴族や王政から大地や耕作する者で象徴される農業への転換である。農業はシャミッソーが愛する植物の循環的な価値への転換の言い換えでもある。城は、現実の城の再現と言うよりは消し去ることを想定して作り上げた城なのだ。

『女の愛と生涯』においては、ひとりの女性が、恋をして、結婚し、子供ができ幸福な人生の後に突然の夫の死を迎えるという話であるが、シューマンが作曲しなかった最後の９番目の詩にシャミッソーの人生観が表れている。「私の娘の娘よ、」（Tochter meiner Tochter,）と呼びかけているので、たぶん相手は孫娘であろう。今までの話は、ここで、この年老いた女性の遠く過ぎ去った「みずからの日々の夢」（Traum der eignen Tage,）であることが明らかにされる。

Du mein süßes Kind,	私のかわいい子よ、
Nimm, bevor die Müde	疲労が
Deckt das Leichentuch,	遺体の布でおおう前に
Nimm ins frische Leben	新鮮な命に
Meinen Segensspruch[17]	私の祝福の言葉をうけよ。

と祝福の言葉をかける。そしてお前は私が嘗てそうであったように人を愛し結婚する。しかし、時は飛ぶように過ぎ、お前は私のようにすぐに年老いていく（そして死ぬ）と告げる。しかし愛がすべての価値であり、時の流れや死を（そしてどんな運命をも）泰然と自然の循環として受け入れているのだと。シューマンは最後の詩には作曲しなかったが、最後の曲（８番目の詩）の後奏で世代から世代に引き継がれる循環の思想を表現している。

『年老いた洗濯女』die alte Waschfrau（1833）においても同じ思想がうかがえる。恋愛をし結婚して３人の子供をもうけるが、夫に先立たれ子供たちを育てる。しかし「信仰と希望は失わず」[18]（Und Glaub und Hoffnung nicht verloren）勤勉と秩序を糧として勇気をもって生きる。

Adelbert von Chamisso: Leben und Briefe, Hrsg. von Julius Eduard Hitzig, Eliborn Classics, 2006,（Faksimile, 1839, Leipzig） S341, S.349.

16 「Antonie Piaste が彼女の名前である。ポーランドの王家の出であるかどうかなどとは、問われまい。－私たちは、市民である。」Robert Fischer : Adelbert von Chamisso, Erika Klopp Verlag, Berlin-München, 1990, S.162.

17 Adelbert von Chamisso: Werke in zwei Bänden. Band 2. Stauffacher-Verlag. Zürich. 1971, S.17.

18 Ebd., S.50.

子供たちが独立し、年をとると彼女は金をためて亜麻を買い、自分で糸を紡ぎその糸で作られた生地で自分のための屍衣（Sterbehemd）を縫い、それを大切な宝とする。この詩の最後の節で私（シャミッソー）が登場する。

Und ich, an meinem Abend, wollte, そして（人生の）夕べに、私は望んだ、
Ich hätte, diesem Weibe gleich, この女のように、私は果たすべきであったことを
Erfüllt, was ich erfüllen sollte　果たしていたことを
・・・[19]

多くのロマン派詩人が、耐えられない現実に対抗する楽園を過去を理想化し詩作の力で思い出の中に作り上げることに詩の本質を見いだしたのに対し、シャミッソーは今のなかに生の価値を見いだそうとする。was ich erfüllen sollte は、「私が果たす運命にあったもの」と訳すことができるだろう。運命に従い失ったものに固執せず、たとえペーター・シュレミールのように不運につきまとわれていたとしても「ほんとうに世の中で私はたいしたものになることができるだろうに、もし私の運命が陰険に私の道をふさがなかったならね。」[20]（『不運』Pech 1828）とは言わず、自然の研究を通じて運命の必然性とその中でどう生きるかを学んだのである。

「ボンクール城」の最後の節は、ロマン派の定型的な表現での決意の表明である。比較のためにもう一度引用しよう。

Ich aber will auf mich raffen,	しかし私は元気よく立ち上がり、
Mein Saitenspiel in der Hand,	私の弦楽器を手に、
Die Weiten der Erde durchschweifen	地上のあちこちをさまよい
Und singen von Land zu Land.	そして歌いたい、国から国へと。

ここに表れる表現は、1810 年に成立し、1813 年に出版され評判となり、現在でも Friedrich Glück（1793-1840）の作曲によって民謡として愛好されているアイヒェンドルフ Joseph von Eichendorff（1788-1857）の有名な詩「リート」Lied のまるでパロディであるかのようである。アイヒェンドルフの詩の一部を引用する。

Ich möcht' als Spielmann reisen	私は楽師として旅したい
Weit in die Welt hinaus,	世界の遠いところへ、
Und singen meine Weisen,	そして私の旋律を歌いたい

19　Ebd., S.50.
20　Ebd., S.67f.

Und gehn von Haus zu Haus.[21]　　そして家から家へと歩きたい。

アイヒェンドルフの詩の筋書きは、信頼していた恋人に裏切られた若者が絶望してどこか遠くへ行きたいあるいはいっそ死ぬのがよいという一見たわいない内容である。しかし、楽師として旅立ち自分の歌を歌うと言うことは、アイヒェンドルフをはじめとするロマン派の詩人にとって、社会の変えることができない過酷で絶望的な現実のなかでもその現実に対抗する真実を発見する出発への決意を意味するのである。

ヴィルヘルム・ミュラー　Wilhelm Müller（1794-1827）の『冬の旅』Winterreise（1824）では救いのないまでに絶望した放浪者でさえ最後には、

Wunderlicher Alter,　　不思議な老人よ、
Soll ich mit dir gehn?　　あなたと行きましょうか。
Willst zu meinen Liedern　　僕の詩（うた）に合わせて
Deine Leier drehn?[22]　　ハーディ・ガーディを回してくれますか。

と自分の詩を歌う意欲を見せる。

３つの詩は内容だけでなく表現も似ている。それぞれ決意する「私」（ich）には、will、möchte、soll のような意思を表す助動詞がついているところまで同じである。つけられた助動詞にも表現されているように語られる内容に応じた決意の差はあるが。

もちろん実際には、つまらない現実に対抗する真実を求める出発は精神的な要素が多い。３人の作家とも長い放浪はしても、それぞれ堅実な職業に就いたが、作家として楽師の役割を生涯続けたのである。

（本学専任講師＝ドイツ語担当）

21　Joseph von Eichendorff: Sämtliche Gedichte. Hrsg. Hartwig Schultz. Deutscher Klassiker Verlag. Frankfurt am Main. 2006, S.84.
22　Wilhelm Müller: Gedichte 1. Hrsg. Maria-Venera Leistner. Verlag Mathias Gatza. Berlin. 1994, S.186.